

本財団では、平成2年度から、毎年約30本、これまで延べ約2万人の参加者を対象に地域振興に役立つ研修を実施しております。今回は、平成21年度に実施した研修の中から、行政と住民の協働による地域づくりを進めていく上で重要な役割を担う「ファシリテータ」について、研修の講師をしていただいた専門家よりその役割と重要性について紹介させていただきます。

テーマ

ファシリテータの役割と重要性

講師



株式会社 石塚計画デザイン事務所

代表取締役 石塚 雅明 さん

1952年生まれ。北海道大学大学院建設工学科修士課程終了後、(株)柳田石塚建設計画事務所を設立。代表取締役。現在(株)石塚計画デザイン事務所、代表取締役。札幌市、横浜市、世田谷区などのまちづくりの現場で、まちづくりワークショップなど様々な手法を用い、地域議論や合意形成に取り組む。また、札幌市や川崎市において住民主体のまちづくり活動へのアドバイスサポートを行っている。2001～2003年、東京大学都市工学科非常勤講師。2005年から公益信託世田谷まちづくりファンド運営委員長。2007年、名古屋大学非常勤講師。

主な著書：『参加の「場」をデザインするーまちづくりの合意形成・壁への挑戦ー』/学芸出版社 『まちづくり学ーアイデアから実現までのプロセスー』(共著)/朝倉書店 ほか

※ホームページ上でもワークショップのポイントを紹介した「ワークショップの玉手箱」を掲載中。 <http://www.community-design.jp/>

案件

これからの地域づくりにおいては、行政と住民との協働が不可欠であり、関係者や住民の方など多くの方と議論する場をつくる手法として「ワークショップ」が注目されている。そのワークショップでは、様々な方の意見を効果的に引き出し、議論を促す「ファシリテータ」が重要な役割を担っている。

POINT

参加者の主体性と創造性を助ける環境づくりを

■地域ぐるみで議論をする大切さ

地域社会の今日の状況は、大変厳しいものがあります。人口の減少、高齢化によりコミュニティの支えあう力は弱くなっています。地域の産業も元気がありません。そのような状況でも、このまちに生まれて良かった、このまちに暮らし続けていきたいと思える地域社会をどのようにつくっていくか。地域の総力をあげて取り組まなければならぬ課題であると思います。

そのためには、「地域の課題や可能性は何か」をきちんと見つけ、地域ぐるみで共有することが大切です。そのうえで、課題を解決するための取組みや、地域の可能性を伸ばし個性を育てていく取組みとして何が必要か、できるだけ広く「地域ぐるみで議論」をすることが有効です。とかく大勢で話すと考えがバラバラでまとまらないと言われますが、その多様な考え方の中に、課題解決の大切なヒントが隠されている

る事があります。また、これまでにない地域を支える力のある人との出会いも生まれます。

■ワークショップにおけるファシリテータの役割とは

多くの人の知恵や力を集め、創造力あふれる議論の場をつくる手法として「ワークショップ」が注目されています。ワークショップという手法は、演劇や教育、企業研修など様々な分野でおこなわれています。そのため、ワークショップを一言で定義するのは難しい面があります。あえて言えば、ワークショップとは「参加者が主体的に参加し、体験や話し合いの場を共有する中で、互いに何かを気づいたり学びあったり創り出したりする場」と言えます。このワークショップの進行役をファシリテータと呼びます。ファシリテータは「Facilitate」容易にする、促進する「人」という意味で、単なる司会者

ではなく、参加者による創造的な議論を促すという役割が求められます。促すという行為も、教育的、指導的アプローチではなく、参加者が主体的に気づき、発想する環境づくりに主眼がかけられます。

ファシリテータの役割は、まず参加者との関係づくりから始まります。自己紹介の際のちょっとした心遣いが、発言しやすい場の雰囲気と発言に耳を

傾けるファシリテータへの信頼をつくります。話し合いに入る前に、ワークショップの目的と進め方を参加者の共通認識にすることもファシリテータの重要な役割です。これはワークショップのプログラムづくりにも関係しますが、話し合いの成果がどのような形で地域づくりに活かされるのかを明確にしておく事は、とても大切なことです。また、話しに入

ファシリテータのコツは3つ。「うなづきの術」、「翻訳の術」そして、「まとめの術」



(上)ファシリテータの役割は参加者の議論を深めること。参加者の発言に対し「うなづき」、時に「翻訳(誰かの発言の要点をわかりやすく伝える)」ことで、論点が活性化します。(左)「まとめの術」の例。参加者の意見を分類に分けることでさらに新しい発見がありました。



「ファシリテータ能力開発講座～ワークショップの進め方を学ぶ～」の様子。「こんなワークショップになったらどうしよう」という不安を解決するワークショップを実践。講義だけではなく、参加者にワークショップに参加してもらったり、実際にファシリテータになってもらい、実践力を養成します。

ファシリテータのコツは3つあります。うなづきの術、翻訳の術、まとめの術です。「うなづきの術」は誰もができて、効果も高い方法です。ファシリテータが参加者の発言に対して笑顔でうなづく事によって、参加者の姿勢も積極的になります。「翻訳の術」は、参加者の理解を助けるためのものです。難しい行政用語の解説や、場合によっては参加者のほんとうに言いたいことの要点を他の参加者に伝える事も重要です。わからない話には消極的や懐疑的になりませんが、わかりやすい話は議論を活性化します。「まとめの術」は、参加者の意見を書きとめ、わかりやすい議論の見取り図をつくる作業です。この見取り図が有ると、話が横路にそれたり、同じ話が何度もくり返されることを避けられます。また、参加者が論点を共有し議論を深め、新しい発見を得るのにはいへん役立ちます。まとめの術という点、あらかじめ決めた方向に、いかにもうまく誘導していくかと捉えられがちですが、決

してそうではありません。すでに結論が見えている事を、大きなエネルギーをかけて議論するのは意味がありません。お役所だけで考えていても、一部の人だけで考えていても解決できない課題に対して、地域ぐるみで、知恵や力を集めて取り組むための話し合いの場を生み出す。ファシリテータは、その創造的な議論を助ける助産婦さんのような役割なのです。

■実践を通してファシリテータの力をつける

どうすれば、そのようなファシリテータの能力を身につける事ができるのか。私はここ数年、電源地域振興センター主催の「ファシリテータ能力開発講座」ワークショップの進め方を学ぶという講座をお手伝いしています。内容は、実際に私がワークショップを実演したり、受講生の皆さんの演習に力点をおいたりして実践型の講座となるように工夫しています。仕上げは、あらかじめアンケートで聞いておいた3つの具体的なテーマをもとに本番のワークショップ。ファシリテータの経験のある方にも、学び直しの良い機会となっているようです。

地域に暮らす一人一人が秘めている可能性はとても大きなものがあります。その力を引き出せるか、出せないか。厳しい状況の今だからこそ、チャレンジしてみる事が大切ではないでしょうか。